WASON
HQ
1104
J74+

Aug. 189
No. 278

女學雜誌

第二百七十八號
明治二十四年八月十五日發兌

教育者樂地
我不恥鄙音
流れの聲　是空子
日本人は哲學者か
年増婦人を短評す

下六番町六番地
女學雜誌社

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 278 AUGUST, 15TH. 1891.

第二百七十八號目次

EDITORIAL :—The Educator's Paradise. I am not Ashamed of the Gospel. Ethics.

CHILDREN'S COLUMN :—"Little Lord Fauntlery." (A Translation.).

MISCELLANEOUS :—Outlook in Japan. (A Foreigner's Critecism.) Middle aged Woman. Brief Sketches of Every-day Life.

THE HOUSEHOLD :—Uses of Salt. Servant Question in America.

THOUGHTS AND FANCIES :—Daily Training. No Impossibility for a Truly Heroic Man. "For Helen." (A Translation.)

NOVEL :—"Nagare no Ashi." "The Serpent in the Heart."

CRITICAL NOTES.

NOTES AND NEWS.

CONCERNING WOMEN.

●社說 教育者眞樂の地〇我は福音を恥とせず〇倫理學

●兒籃 小公子(若松しづ子)

●雜錄 外國人の評、日本人は哲學者か〇年增婦人〇浮世の短評、笑草六つ

●家政 鹽の効用〇下婢に質問の事

●隨感 日常不斷の修練(もみぢ)〇難事(しのぶ)〇佳人の歌(みどり)〇

●小說 流れの蘆(滋)〇腹中の蛇(其四)〇

●批評

●時事

●女報

女學雜誌社出版書目

鈴木弘恭大人述	つれ〳〵草講義	一冊	價金八錢
鈴木弘恭大人述	文法口授	一冊	同十六錢
鈴木弘恭大人述	百人一首講義	一冊	同三十五錢
船越鼎太郎君著	產婦小兒攝生法	一冊	同十六錢
關輪正路君纂	ひめ鑑	一冊	同四十五錢
中島俊子著	善惡之岐	一冊	同卅五錢
橫山雅男君著	婚姻論	一冊	同十六錢
島田三郎、植木枝盛兩君演說	廢娼演說	一冊	同五錢
巖本善治述	妓樓全廢	一冊	同五錢
島田三郎、巖本善治同著	公娼可滅	一冊	同五錢
農學士寺尾熊三著	植物學	一冊	同十二錢
林學生星野愼著	昆虫植物金石採集法	一冊	同十錢
明治女學校教師八木衆辰著	和書手本	四冊	同一圓
女學雜誌社編輯	演說著作材料	八冊	同四十錢
巖本善治著	[illegible]子小學	一冊	同八錢

下六番町六番地
女學雜誌社

女學雜誌 第二百七十八號 明治二十四年八月十五日發兌

社説

山中獨語（上）

記者目下京に在らず、去月來函山樹青く水白き畔に暑を避けて、久しく時事に耳を熱せしめず、朝たには躬から舟を行りて湖心霧深く影を沒する處ろに聖經を肅讀し、夕には巖踞とまり梢覆ひ露落ち水音ひそめくの渚に、靜かに祈禱す、此を以て情幽氣邃にして運筆自由ならず、例の如く論文を草すると能はずと云ふ、則はち短篇數則を書送して之に充てんとを命ず。題して獨語と云ふものは、蓋し未だ公けに絶叫するとを樂しまざるの意か。然れども遂に之を揭げて社説に代ゆと云ふ(編者云)。

○教育者至樂の地

人の性と運命とを明知したるもの、古來未曾て基督の如きはあらず。彼の論ずるや、揣摩臆測せず、天を言ふと掌に指さすが如く、之を示すの狀、權威を以て命ずるに似たり。

其十字架上に刑せらるゝに當りては、天下の魔鬼圍繞して之に咆哮せり。匹夫下郎、驕然として鎗を執り、地上第一の聖人を逆殺するとを譽れと爲す。弟子、悉とく亂散逸逃し、至寶を棄てゝ、汚泥濘に隱る、古來無比の大先生に殉死するの光榮を放擲せり。滔々たる無情水の如き野人、環立仰視して、冷やかに笑ひ、邦家最上の救世主を殺すとを樂しみとせり。此時に當りては、道を求めたりし人、律を正したりし人、情けに動きたりし人も、石の如く、獸の如く、鬼の如し。天道是か非か、人情賴むべきか、否や。蓋し、何人と雖ども、心に疑惑の念なくんばあらず。

彼は毫末も天に對して疑ふ所ろあらず、是れ素より其處ろなり。然れども、彼が亦た毫末も人に付きて絶望するとなかりしは、驚ろくべき事にあらずや。

彼れ終りに、感謝して云く「我れ世に勝てり」と。世に勝てりとは、人を救ふとを得たりと云ふの意にあらずや。人を救ふとを得たりと云ふは、人の遂に神化するとを得るの道成就したりと云ふの意にあらずや。あゝ、彼の石の如く、獸の如く、鬼の如き人は、尙ほ遂に神の如く化するとを得べしと云

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

ふ也。

人の性と運命との大智識は、確證を與へて云へり、人は神の如くなることを得べしと。

世界第一の光明に接して尙ほ之を暗しとなし、世上最直の道に到りて尙ほ之を曲れりとなし、天下最正の眞理を見て尙ほ之を疑がふ所ろの人類も、尙ほ神の如くなることを得べしとなり。人や、人や、汝ぢはそも如何なる高貴靈妙の動物ぞや。

左れど、何如なる人も、皆な、何如なる時に於ても悉とく神化すと云ふにあらず、能く大道に觸れ神意に接するときは則はち初めて神化すと云ふのみ。ダル井ン曰く、動物は、包圍に隨れて發達すと、人として神の如くならしむるは、則はち之をして神の包圍に接はらしむること是れ也。

宗敎とは何ぞ、人をして神に接し、神の意を躰し神の心を奉じ神の事を爲さしむることを旨とす、即はち神の包圍に彌よ近づかしめ、遂に之と同化せしむるの也。ドラモンド云く、所云る宗敎上の生命とは、神に接見すること是れ也、此の生命なきものは、枯木の寒烏を載せて之を覺らざるが如く、神の天地に接して而して神を識らず、神を識らずして其包圍に接はらざるが故に、遂に神化すること能はず、之を宗敎上の死せる人と云ふと。

人は神の殿堂たることを得、亦惡鬼の巢窟たることを得。基督は能く惡鬼に勝ち、人を導びきて神に來らしむることを得べしと信じたり。此の故に、謝して云く、我世に勝てりと。則はち人は、大先生基督に導びかれ、神に接して、遂に神の人となることを得る也。基督此を想見確認し、遙かに未來の天國を望みて、人の運命を察知したり。

故に、基督の心を知るものは、人に就きて望を失ふことあるなし。人は能く神の如くなることを得べしと信ず。

敎育に從事するもの樂しきこと幾干ぞ。もし人をして神の包圍に接せしめば、人は遂に神の如くなることを得べしと信ず、樂しきこと幾干ぞ。

之れたゞ漠然たる希望にはあらず、大哲學者よりも更に好く人の性と運命とを知りたる基督は、斯の如く論證せり。然れども、其證しは、たゞ論辨にはあらず、基督は、人の形を以て現に既に其神人となりぬ、万づの人皆な彼が如くなることを得べきことを確證したり。

人を敎へて、人の容易に改まり難きを見、亦た、敎へたる人の容易に惡に染むを見、人性の弱きは流れの葦の如く、運命の左右に轉ずると、谿谷の細流に均しきを見、心を落して深夜失望するとなきにしもあらず。此時に當りて、十字架上基督が、而も尙ほ人性に絕望せざる天の聲を想ひ起し、衷情一新、希望再湧、感謝して、上帝の恩を味わずと云ふはあし。

○我は福音を恥とせず

ポウロ、衷心の慷慨を吐きて云く、我は福音を恥とせずと。世人切りに此の語を轉唱す。吾人一と度び之を聞く時は、密かに怪訝に堪へざるものあり。堂々として、福音を恥とせずと云ふ、然らば、福音に多少の恥とすべき者ありや。福ひの音づれを語るとを恥づと云ふは卑劣尫弱此上なきとにはあらずや。豪强の英雄、信念山を動かすに足るの大使徒にして、何の故に斯る奇怪の言を爲せし乎。

つねに父母の膝下に育くまれ、曾て一日も家より離れたるとなきものは、寸刻、父母より別るゝも尙ほ非常の苦痛なるべし。幼にして家を出で、流浪轉遷、久しく無緣の界に困苦したるものは、遂に此の味ひを知らず。基督將に死せんとして、人類の前途、道を守るものの迫害などに思ひ到り、頃刻、神の保護を忘れて、人の弱きとに心煩らひせしとき、直ちに悟覺して謝して、訴たへて云く、吾神何んぞ我を棄て玉ふやと。此節最切なる苦痛は、生平、神と同化して、寸毫の違背なき樂地に安んじたるものにあらずば、感ずるとなし。

ポウロは、タルソに生れ、當時世に知られたる學術の蘊奧を極め、ストイック、アカデミックス、など諸理學の哲理を味わひ、生れて英資あり、長じて慨然民を救ふの志あつく、當世の事務に慣どりて、頗ぶる任ずる所ろのものありき。一旦飜然として悔ひ、追ふて基督の徒弟となり、其傳道に從事す。之を語るに、智慧の美れたる言を用ひず、極めて愚かなるに似たる言語を用ひたり。

アンテヲケ、エペソ、ニコポリスの各地に道を傳へ、遂に學術旺盛、人智最とも進みたる希臘國アテンスに入りアレヲ山上に立つて、學者が目前に傳道したり。

學者輩は、哲學により、生物の學理により、社會と人性との

理により、ボウロが所説を嘲けつて、冷笑し、此の明謬者何事を言ふやと罵りたり。

無學の人ペテロは恐らく其苦を感ぜざりしなるべし、熱狂の少年ステパノも亦た之を感ずるの暇まあらざりしなるべし。たゞボウロは、昔日の學識により、諸理學者が心中の嘲けりに一々感通し、其意味を悟了すると、電氣の一身を走るが如し。而も、彼は既に理學に優るの理を知り、哲學に超ゆるの哲義を知れり、たゞ之を哲理に照らして相ひ違ふ所ろの懸隔を味わひ、密かに學者が迷ふ所ろを察し、其嘲ける所以を知り、慷慨尋常ならず。

叫びて云く、學者何處にある、智者何處にある、此世の論者何處にある、吾は福音を恥とせざるもの也と。

あゝ、道の爲に、才を沒し、德の爲に智を隱すの殘り惜しさは、無才無智の人の決して味はひ知らざる所ろ、其苦と其の犧牲とも亦た彼輩の經驗せざる所ろなるべし。

然れども、大才は道に適ふにあり、大智は德を立つるにあり、道德に合せざるの才智を用ひて、功を一時の成立に安んずるものは、眞とに賢なるものにあらざる也。然れども、道德の爲めに、才智を屈するの痛苦は即はち痛苦なり、此の痛苦は元來才智なき人の知らざる所ろ也。

然りと雖ども、立德達道の樂しみに比しては、何事の痛苦か之を忍ぶに難きを覺へん、小才細智を弄して、百年の大事業を毀ち、微虫の巣を造りて亦たちまち之を破るが如く、念志永遠に達せざるは、人靈の恥づべきものにあらずや。故に、大賢は細智小才を用ひず、俗人之を見れば殆んど愚なるが如きなり。然れども俗に於て愚なるは、即はち神に於て賢ときあり、一日に巧みなるは、百年の大拙なり。

吾は、福音を恥とせず。道を守るが爲めに愚なるが如きは則はち大ひに賢あるの故のみ。人よ、百年の大道を望みて、一日の俗評に局促たるとなかれ、猛然、才智の小を棄てゝ、絕叫すべし、吾は福音を恥とせずと。

○倫理學

倫理學は諸學の粹なり、諸の大哲學者一生の歸着遂に此粹を吸取せんと欲するに過ぎず、而して紛々たる是非の論議未だ容易すく定まらず。

生物の學理未だ明らかならざるに當りて、世すでに生物の活

きたるものあり、たとひ學理未定らずと云ふと雖ども、活者は生きざるを得ざりけり。倫理未だ確定せずと雖ども、人は之が爲に道義を輕んずべきにあらず。

道義實行と、倫理研究とは、自づから別事に屬す、一を以て輕々しく他の根底を動かすと能はざるや明けし。

左れど、倫理所論の一變一動によりて、人心を左右するの强大なると、殆んど意想の外に出づ、孔丘に從んか、楊墨に從んか、佛か、基督か、若くは、プレートか、コムトか、カントか、ベンタムか、バットレルか、シヤフテスベリーか。其一貶一褒によりて、國民一世の方向に至大の影響を有す。

今に於て、學に志ざすとの深きものは、須からく尤深く此科の講究に思ひを傾むくべし、邦家の前途過半は之によりて決せんとす。

慨然志を立て、一世の師表を以て任ずるの有爲少年はなきか。

郷願はくは此學の至大至重なるに一念せよ。

然りと雖ども、倫理を研究するものは、其道念先づ深厚ならずんばある可らず。倫理講窮の最大要素は、學生の道念之れなり。今の硏窮者先づ第一着歩に於て之を欠けり。

兒籃

小公子。

第七回（戊）

若松しづ子

さてモドント氏が暇を告げて歸り升時に其手紙を持つて行き升たが、まだ外に家へ土産に持ち歸つた物が有升た。何かとあれば、是までドリンコート城へ推參して、歸途、彼の並木道を通ふる時分に、曾つて心に味つたとのない愉快と、希望とでした。フォントルロイは戶口まで敎師を見送つてから、お親父樣のお側へ歸り、

サア、これから、かあさんの處へ行つても好いですか？かあさん、僕の來るの、待つてるだろうと思ふんですから、

とい升と、侯爵樣は、暫らく默つて入つしやい升た、そして、其前に貴樣が見度だろうと思ふ物が廐にあるが、どふだ？呼鈴を引かうか？

フォントルロイは、急にポット顏を赤くし、

お親父さん、誠に有がたう、ダケド、僕、それは、明日見た方が好ですよ、かあさん、僕が來るか〳〵と思つて、待つて

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

るんですもの、

そふか、そんなら好い、馬車を云ひ付よう、

と抑つてから、又暫らくして、無雜作な調子で、

ナニ、小馬が居るんだ、

フォントルロイは長い息をつき、聲をたてゝ

小馬！誰の小馬なんです？

貴樣のだ、

アレ、僕の？二階の色んな物とおんなじに僕んですか？

そうさ、貴樣、見度か、見度ければ、こゝへ引出させようか？

フォントルロイの双の頬はます／＼赤くなり升た、

僕、小馬なんか持ふと思ひませんかつたよ！チットモ、そんなと、思はなかつたんです、かあさん、どんなに、嬉しがるか知れませんよ、お祖父さん、僕になんでも下さるのネ

侯爵は、また

貴樣、見度か？

フォントルロイは又長い息をつき、

僕、見度なんて、僕、見度くつてしようがないけれど、暇がないかも、知れないんですもの、

貴樣、どふしても、お袋の處へ、けふ行つて、逢はなければならんと云ふのか？貴樣、延ばす樣には行ないのか？

エー、だつて、かあさんもけさつから、僕のと考へてたんですし、僕も、かあさんのと、考へたんですもの！

ハ、ア、そうい譯か、そんならば、呼鈴を鳴せ、

さて、同車で並木道の、蔽ひかゝつた木々の間を通る間、老侯は沈默でしたが、フォントルロイは中／＼そうでは有ませんかつた、其小馬の話を頻にして居ました、どんな色で、どの位大きいといふと、其名はなんといつて、何が一番好といふと、今いくつだといふと、あしたの朝、何時に起たら、見られるといふとなどを尋ね升た、話しの合間／＼には「かあさん、どんなに嬉しがり升か」と頻りに云つて居升た、それから又、かあさん、お祖父さんがそんなに僕に深切にして下さるの、どんなに有がたがり升か、僕小馬が大好なの、かあさん、よく知つてるけれど、僕だつて、かあさんだつて、僕が小馬持つだらうなんて、チットモ思はなかつたんです、アノ、五町目に小馬を持つてた子が有つたんです、そうして毎

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

朝乗つては歩いて居たんです、それから、いつか、かあさんと僕、其人の家を通つて、居るか知らと思つて、見て見たんです、

それから、布團へよりかゝつて、頻に老侯のお顏を見守つて、暫らく、だまう居升た、軈て、大層子細らしく、

僕、お祖父さんの樣な人、どこにだつてないと思ふんです、ダッテ、いつでも好いと斗りして入つしやるんだもの、そうして、他の人のと考へて入つしやるんだもの、かあさんが度々そういひ升たよ、自分のと、考へないで、人のと、考へるのが一番好いとつたつていひ升たよ、デ、お祖父さんが丁度そんな人だと、僕思ひますよ。

御前は大層結構らしい人物に畫き出されたので、流石に、氣臆れがして、何といふ言葉も有ませんで、先、少し考へてから返答をしようと思つて居られ升た、幼心の淡純な一ッで、自分の卑劣、勝手な目算を一々、善良、優愛的な趣意に推し違へられるのは亦、一種特別な經驗でした。

フォントルロイは賞嘆の眼………いかにも、パッチリした、涼しそうな、あどけない眼を離さずに又いひ升た、

お祖父さんは、どふも人を幾人も悅こばせたと、ソラチ、勘定して見升よ、ミケルとブリヂェットと十人の子供でせうネ

それから、林檎やのおばあさんと、ヂックと、ホッブスさんとヒッギンスさんと、ビギンスのおかみさんと、モドントさん、モドントさんだつて嬉しがつたに詫つて升からネ、それから馬だのなんだの、いろんなとで僕とかあさんでせう、ソラ、僕、今、だまつて指で勘定して見たら、お祖父さんの親切した人、丁度、二十七人有升よ、大變じや有ませんか、丁度二十七人です、

ハ、アそれじや、己が皆なに深切にしたといふ譯あのか？

エー、そうですとも、お祖父さんがみんなを悅こばせたんです、

こふいつて、少し遠慮氣味に控へて、

アノ、お祖父さん、知つて升か、人が侯爵のと、知らないと、時々間違つて升よ、ホッブスさんも、そうでしたよ、僕、手紙を遣つて、よふく、話して遣ろうと思つたんです。

ブップスさんは侯爵のとをどんなに考へてたんだ？

アノネ、こういふ譯なんです、ホッブスさんは侯爵なんか、一人も知ないで、たゞ本で斗り、讀んでたんでせう、そうして

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

こふ思てたんです、……お祖父さん、氣に掛ちやいけませんよ、アノ、血まみれな壓制家だと思てたんです、だから、自分のお店へなんか足踏もさせないなんて、いつたんです、それだけど、お祖父さん知つてたら、丸で、違つた考へになるに誂つて升よ、だから、僕、あなたのと話して遣るんです、だ何んていつて、話すんだ？

フォントルロイは一心になり、

なんていふつて、僕、あなたの樣な、深切な人、聞たとがないつて、そうして、いつでも他の人のと斗り考へて居て、悅こばせて斗入つしやるつて話し升わ、それからアノ、僕、大きくなつたら、丁度、お祖父さんの樣になり度つていひ升わ。

御前はさえ〲した其顏を見詰めて、

ナニ、丁度おれの樣になり度といふのか？

と仰つて、流石にかしけたお顏の面にそれとも分かぬほどポンヤリと赤みがさし升た、そして俄かに眼を外向けて、馬車窓から外面をお眺なさい升たが、大きな山毛欅の樹の艶〲した茶色の葉は、日影に輝り渡つて居り升た。フォントルロイは耻しそうに、

エー、丁度、あなたの樣になり度んです、

と云つて、亦跡から、

そうなれゝばです、僕、そんなに好い人になれるかどふだか知れないけれど、マア遣つて見るんです、

さて馬車は木々の綠が影をなす合間〱に、黃金の光を漏してゐる壯嚴なる並木道を轟つゝ、進行致し升た、フォントルロイはしだか生繁り、桔梗の微風に招て、なびきなびいてゐる、美しい氣色や、草深い處に立たり、寐たりしてゐて、馬車の音に驚かされ大なビックリした眼をこちらへ向る鹿の群や、茶色の兎が跳ね通るのを見たとは前日の通りでした、又野鷄の羽や、小鳥が囀り、呼び合ふ聲を聞て、何も彼も、前日よりは一入見事の樣におもひ、四方の美に圍まれてゐる心に、得も云われぬ愉快が滿ち〱て居りました、老侯も亦同じ樣に目には外面を眺めて居られながら、見聞なされた物斗は是とは丸で違つて居り升た、此時老侯の眼の前に、何か外事の樣に段々と見えたものは慈善らしき業も、深切めいた思遣りも、皆無の長ひ生涯でした、元來、春秋に富み、健康で、財産にも權力にも不足のなかつた者が、日を過ごし、年を經るに隨がつ

て、たゞ〳〵己れ一人を樂しませ、年月をつぶそふが爲に、雄壯な精神も、富しも權力も悉く消費し盡して、さて、其果に春秋は行て再び呼戻す術なく、老衰の襲ひ來る時分に、有餘る寳の中に坐りながら、ションボリ、眞の朋友一人なく、自分を嫌ひ、恐るゝもの、或は追從し、諂ふ者は有ながら、自分の損得に係わらぬ限り、此老人が生存らへようと、死なふと意に介するものが一人もない、哀れな境界を迴想われ升た。老侯は現在、遙かに、眼も及ばぬ田畑は、御自身の處有で、面積はどの位、價値にして、どの位、又是によつて、生活を立てゝ居る小民どもの數は、どの位といふとなどふだんフォントルロイが知らぬとまでも、此時思迴はして居られました。それに加へて、またフォントルロイの知らぬとで、此時、老侯の心に浮んだとは、さしも廣い領地に棲活して居る小民どもの中で、上も下も、推なべて、老人の財産や、門閥や、權力を貪つて、出來れば、甘じて、自分等のものにしよふと思者こそあれ、此純潔る小供に倣つて、假にも、殿樣を善良な人とか、その性質に似度などゝ思ふものは一人もないといふとでした。さてまた、七十年の久しい年月の間、己を以つて足れりとして、自分の安逸か、さなくば、娛樂に關係せぬとては、世間の人が自分を何と思わふと、一向に頓着せぬ厭世的な、世なれた老人でも、こふ考へては、流石に心地の好い事は有ませんかつた。全體、こふいふとは一切考へ起さぬ樣に、かまへて居られたのでしたが、一人の幼ない子供が、自分を善良な人と信じて、其足跡を踏み行ひ、其手本に習わふと云つたに付いて、實際、自分、人の手本になるに適當で有ろうかといふ、チト新奇しそうな疑問を、心に呼起されたのでした。

フォントルロイは老侯が園を眺めながら、眉を頻りに顰め玉ふのを見て、さては、おみ足の痛むとだろうと心得、幼稚にしては、珍らしいほどの斟酌をして、なる丈、邪摩にならぬ樣に、沈默に、外の氣色を樂しんで居り升た。そうこふする中に、馬車は門を過ぎ、暫く、綠の生垣の間を鳴渡らせてから、軈て止りました。即ちコート、ロッヂに着したので、丈の高い給事が馬車の戶を開ける間も有らせず、下へ飛び下りました。老侯は急に追想の夢を破られてビックリし

ナニ、もふ來たのか?

エー、サーお祖父さんの杖をあげますよ、お下りなさる時

僕にズット寄つかゝつて入らつしやいよ、

御前は雜泊に、

おれは、下りはしないのだ、

フォントルロイは、さも驚いたといふ顏で、

アレ、………かあさんに逢に來ないんですか?

老侯は冷淡に、

イヤ、御免を蒙るのだ、貴樣行つて、新らしい小馬の見たさも、逢たさには代へられなかつたといふが好かろう、

かあさん、失望しますよ、キット御祖父さんに逢たがつて居升もの、

ナニ、そうでもあるまい、歸りに又迎によるぞ、これ!ダマス、ヂェッフリーズに、モウ參れといへ、

ダマスは馬車の戸を閉ぢ升た。フォントルロイはまだ不審顏をして居ましたが、軈て家へ行く馬車道を駈け出しました。此時、御前はハヴィシャム氏が前に一度見たことがある、走て、殆ど地に着かぬ程速かで、屈強な双の足を眺める折を得られ升た。其足の主は一分時も暇を惜しむ者であつたことが明白でした。馬車は徐かに進行いたし升たが、御前は、暫らく、後ろへ憑らずに外を眺めて居られました。植込の間から家の戸が見え升たが、其中、戸をズット押開けるものがある。こちらからは少さな人が一飛びに階段を上る、モ一人、是も柔かな、若そうな、黑の着物の人が、走り出して來ると見る中に、双方から飛んで來て、一所にあつた樣に、フォントルロイは母の腕に縋り、頭を抱て、其可憐な、若々しい顏を處えらまず、キスのしつゞけをいたしました。

雜録

外國人の觀察、

日本人は哲學者か。

撫象子

むかし、唐の文明日本に輸入せるとき、先づ、衣服、器具、など、盛んに來り、次いで、詩章、論説の類ひ、稍や流れ着せんとしたれど、暫らくにして止みぬ。

佛教の初は大乘を輸たせしものありしが、日本の先覺は之を物の用に立たずとなし、各自新たに工夫して、さまざまの派を開き、實地の用に應ぜしめんとなしぬ。

基督教も、明治六年以來、主として福音的の傳道盛んなりし

が、中ごろ少し理論に走らんとして、明治十六年に再たび、元にかへり、一昨年來再び理論に走らんとして、人々様々に惑ひたるようなりしが、此頃に至り、又もや福音的に盛かへし來りぬ。

此等の景勢を察してか、西洋人にして日本人の氣質を論評せしものあり。面白ければ、左に記さん。

彼の、グリフヒス氏は言へり、日本人は果して東洋の希臘人なるか、日々新らしきことを好むのみならず、更に物の道理のみ窮めんとするか、近來日本の書生が盛に論ずる如く、日本に傳道せんほどのものは、先づハーバード大學にて心理學の講師たり、ジョンス、ホプキンスにて歴史の講師たり、更に比較宗教の事に精しきこと、マクスミニウレル、又はゼームス、フリーマン、クラークスの如き人たらずば、適任にあらざるか。一言するに、日本に傳道するものは、先づ大學者たり而して后ち宣教師たることを要する乎。日本を救ふものは、哲學たり、神學たり、純然たる精神的の福音にはあらざる乎。

グリフヒス氏は、此問に對して、否と應へ、成程日本には多少の哲學好きはあるべし、又日本人は、たゞ元のまゝに摸倣することを嫌ひ、必らず、之に附加し、之を改良し、之を適用するの才に富めるなるべし。然れども其一般の國風は、決して、哲學を好むものにあらず、日本を大ひに動かすものは、議論にあらずして、實際的にありと云ふ。

パーシバル、ロエリ氏、「遠東の精髄」中に論じて云ふ、支那人及び日本人は、哲學を好まず、思想は常に物質的に走り、人靈の事に頓着せず、故に彼等は先づ自己を知ることを要す、特に日本人は、尤とも切に自から其靈魂の穿鑿を爲すことを要すと云へり。

チャムバーレン氏は亦言へり、日本の基督教は、純然細密の理論よりも道徳及び實行の事に主として關係するものとなるべし。即はち、矯風の事、安息日問題の事など、大議論の種となるべし。日本人は毛を分が如き神學上の細密なる議論に趣味を有せず。唯理的の佛教が日本にて失敗したる殷鑑は、今後日本に於て基督教が何如に成行可かを指示して餘あるなりと。

日本人は、西洋人に向ひて、哲學思想あることを常に誇るなり、而して西洋人が普通の論評は、大率ね斯の如し。

年増婦人

年増婦人、即はち、中年の婦人は、一の研究すべき好問題なりとて、ノース、アメリカン、レビウの知己、ケーテ、エルス女史は、一論文を彼雜誌に投じたり。云く、

年増は、婦人の身として最とも幸福なる時機なり、愛嬌も豐かなり、智慧も増し、爲せし仕事も多く、經驗も重なり、話しの種も十分にて、此時、萬事面白味の種ならぬはなし。女子は男子よりも罪を犯すと少なし、然るに、男子が罪を犯すと尤とも多き年は、二十五歳の頃なれど、女子は三十五の頃なり、嘗て人殺しをしたる婦人百三十八の年齢を調べたるに、平均三十四歳なりき。何處の國にても、人が罪を犯すとの尤とも多き年齢は、女の方、男よりも遲し。左れど、女は男よりも君子なり、犯罪少なし。夕方と云ふ時節は、中等の頃の尤とも危險ある時刻なるが、男は出歩るき、女は家に居る。年増は、大方、文學を好むよりも、慈善を好むものを多しとす、文學は其若き頃の嗜しみにして、人を愛するの熱情は、其の後年に至りて發達すると見へたり。

浮き世

（一）

ある宣敎師、會堂出席の商人に向ひ、

どふでした?。今朝の說敎で、少しは、利益をお受けなさい升たか。

商人、ムットして、

私は、日曜には商法の方は一切介まひません、敎會へ出ますに利益などを見込んで來たとは有ません。

（二）

はたご屋のかみさん、書生達の惣立を見送り、茶代の見えぬに氣付、恥かしめんものと、跡の一人に向ひ、鷹柄に、

一寸、旦那、なにかお忘れなさつたとが有ませう?。

跡の書生、其樣子を見てとり、

イヤ、本當にそうだつた、これは有がたう。

といひつゝ、盆の下より半圓札を取出し、ニコ〳〵しながら、紙入へ納めて出て行く。

（三）

先頃、隣家の二郎といふ八歳の子、學校にて石鹼といふ文章

の宿題を貰ひたり、即はち歸りて、書たりしは、左の如し、
石鹸は甘そうな菓子に似たる妙な物なり、臭は好けれど、味は甚だ悪し、石鹸の汁は目にハイル時最も味はひ悪るし、アイヌ人種は石鹸は決して用ゐぬと父様云ひたり、僕もアイヌ人になりたく思ふなり。

（四）

一年前に嫁せし婦人、元と居たる家に泊掛に來たれり、其家の五才の娘は暫く指をくはへ、はにかみ居たりしが、軈て、少しくなじみて、

娘 おばさん、先に家に居たの？ 婦人 エーそーです、 娘 それから、おばさん、嫁に行つちまつたの？ 婦人 エー、そうですよ。

娘 そんなら、歸つてまた、家へお嫁に入らしやいな。

（五）

ある田舎の西洋料理に物誂ひし紳士、給事に出たる男に、コレ、お給事、柔らかいわい鴨を持て來いといつたじやないか、それに、これはなんだか、こわいしやもの様で、食えんは。男、ナニ、旦那、こゝいらじやあ、しやもに合鴨を孵へさせ升だ、スルトどうしても、しやもに、似て來るでさア。

家政

○鹽の効用

あらゐ

毎日使用てゐる極普通な廉價なもの丶中に、思もかけぬ無量の効能のあるものに氣の付かぬ事が御坐ります。例へば、鹽などは其一ッで私共それ程効能のあるものとは思はずに居ます、夫故實驗した鹽の効能を、少しく左に記して見ましやう。

（一）疲れたる目を、淡き鹽水にて洗へば餘程心地よくなります。

（二）胸の焼けるにはコップに半分計りの水に茶匕に一盃の鹽を、交ぜて飲めば、直ります。

（三）毒虫等に刺れたる時は、鹽を濕して、刺されたる所にぬり、布にて堅く結置べし、忽ち痛を去り治まる事妙なり。

（四）齒を磨くに鹽を用ゆれば普通の齒磨よりも齒の爲に宜く齦を堅固め齒に光澤を出し悪き臭を消す。

（五）疊又は敷物を敷く前に床の上に濕りたる鹽を振りまけば蟲を生ずることなし。

（六）神經痛には金巾の小き袋を作り中に鹽を充分入れ、よ

く煖め痛所に載せ置くべし鹽はいつまでも煖氣を保つもの故大に痛を和ぐる力あり。

(七) 庭園に雜草の生ゆるを防ぐには鹽(粗品にてよろし)を草の上に度々振りかくべし但し植木草花などにかゝらぬ樣注意すべし。

(八) 鼻加答兒には毎朝湯にて濕めしたる鹽を掌より嗅上ぐべし、又毎夜寢に就くとき汐水にて嗽ひすれば咽喉を强くし聲を使ふによし。

(九) 敷物にインキを覆したる時は多量の鹽を其上に振りかけ幾度も取替てよく摩するなり鹽悉く、インキを吸ひ取らば刷毛にてきれいに拂ひとるべし。

(十) 火中に惡しき臭のするもの燃ゆる時は速に鹽を火中に投げ入るべし又牛肉豕肉など煮るとき過つて脂を火の中に落し火勢盛なる時など此方を心得れば、極めて都合よし。

(十一) 鎮鍮の器具は鹽と酢を和交して磨けば美しき光澤を出す。

(十二) 茶の澁又は油等にて陶器類の汚れたるものは濕りたる鹽にて磨くべし奇麗になる事妙あり。

(十三) 毛氈敷物類は一旦掃き淨めし後鹽水にて拭けば一層きれいになるべし。

(十四) 遠路を歩み又は長く立ちて脚の勞れし時兩脚を鹽湯に浸せば疲を治す鹽の分量は手一盃の鹽を三升の湯に溶くを適宜とす湯は成的熱くなし置き手にて膝まで注ぎかくべしかくて湯の冷むる迄おき、其あとを乾きたる手拭にて烈しく拭ふなり脚の神經痛は朝夕此樣に脚湯すれば久しからず愈ゆるものあり。

以上は纔に鹽の效用の重なる所を示したもので御坐りますがまだ此外に幾許の效用を有するか分りません。經驗に富める細君方はよく御存じであろうと信じます。

○家婢に質問の事

召使ひの問題は、英米にいよ〳〵喧まし。氣に入らねば、直樣出で行くの自由を有する、米國の下婢より、やゝ穩やかなりと云へど亦同樣の自由權ある、英蘭、蘇格蘭の下婢に至る迄、近來家政上の問題とならぬはなし。下婢の方にも宜しからぬ所ろ多かるべし。左れど之を使ふ所

ろの細君の方にも、亦少なからぬ過ちあるなるべし、故に、ダルヰン夫人は、先頃ろ、ナインテンス、センチウリー雜誌にて此事を論じて、左の如く言ひけり、

下婢の心得を所望する前に、細君の心得を所望するヿ亦大切なり、左れば、細君は、其手元に二年以上召使ひて、今は暇を出したる下婢の一人又は二人を顧問となし、只今新たに雇ひ入れんとする下婢に、此顧問の名と宿所とを示して、行いて、自己の氣質を問ひ質さしめ、且つ此顧問に請ふて、自己に彼等が所望する箇條を聞來らしむべし。斯して細君先づ其過ちを悟り、自から矯めなば、下婢も亦自づからにして善くなるべし、且や此のやうにして質問したる答へを所々にて取集め、之を公平に概括しなば、目下、尤とも好き下婢連中が、細君の所行に對して所望する輿論の如何なるやを、承知するヿを得べし、と思ふ、云々。

ジョン、ラスキン曰く、われ一つの義務を怠るは、一の新に知るべかりし眞理を失ひたるなり。

カント曰く、義務とは、律法を尊敬するの心より、律法に從順ならんヿを要するの感覺これ也。

隨感

日常不斷の修練

もみぢ

道に志ざし、德に立ち、品を高くせんと欲するの人は、不斷日常に於て、密かに修練する所ろ厚からずんばある可らず。

偉大絶倫の英傑を見て、此は自づからにして然あるべしと心惑ひ、眩然として恍惚瞠若たるものは、精神の弱々しき浮れ人なり。

西鄕南洲先生の言はく、

誠は、見ざる所ろに於て戒愼し、聞ざる所に於て恐懼する所より手を下すべし、次第に其功積で至誠の地位に至るべきなり、是を名けて君子と云ふ、是非、天地を證據に致すべし、是を以て事物に向へば隱すものなかるべきなり、司馬温公曰く、我胸中、人に向て云れざるものなしと、この處に至ては、天地を證據と致すところにてはなく、即はち天地と同躰なるものなり。

變事俄に出來せる時動搖せず、從容として其變に應ずるものは事の起らざる以前定まらずんばある可らず、變起らば

只それに應ずるのみなり、………事に當り思慮の乏しきを憂ふること勿れ、凡そ思慮は平生默坐靜思の際に於てすべし、有事の時に至り、十に八九は履行せらるゝものなり、事に當つて卒爾に思慮するは恰かも臥床夢寐の中、奇策妙案を得るが如し、翌朝起床の時に至れば無用の妄想に類するもの多かりしを知らんと。

難事

しのぶ

難事に出で合はば、天、われを重しとし、此の重大の事を任じ玉ふと思へ、又、天われを高くせんとて、此の艱難の學科を與へ玉ふと思へ、又、人類進步の方向に於て、何日かは到底此支障を除かざるを得ず、われは則はち其剪除を爲すものなりと思へ、われもし之を避なば、後の同胞之に當らざることを得ず、われ今些さかにても之を破り置かば、則はち后日の進步に數步を備へ置たるなりと思へ。又、われの之を避くるは、天の學科を無みし、天の惠みをおいがしろにするに異ならずと思ふべし。カーライル言く、

眞理と、慈悲と、自然界に聞ゆる永遠の聲と、哮り叫びて余れに「爲せよ」と命ずるの時は、膽勇ある人の心の字書の中に「不能」と云へる文字あることなし、多くの人「不能」と云ひて騒々しく顚倒避退す、汝ち唯一人路に當りて遺されたるの時は、輙はち是れ汝ちが爲すべきの時、汝ちが伎倆を試むべきの時、初めて到來したるなり、今は即はち汝の時なり、須からく斷じて爲すべし、徒らに他の談助合力を求むること莫れ、但だ汝自己の力と、天上の神の力とに委頼すべし、同胞よ、此時、汝は一層高大の事に達すべき好機會に出で合へり、亦た永遠の天の面てに一の勇猛なる生涯の記錄を銘することを得べき好機會に出で合たり。

ワルド、エメルソン、亦歌ひて云はく、

壯嚴偉麗の氣、塵芥の我が骨に近づき、
　天上の神、地下の吾等、人に接し玉ひ、
「義務」は、低聲に「汝可爲」とさゝやく時、
　少年、毅然として答ふらく「余能くせん」。

老西郷又言く、

事の上にて機會を唱ふるもの二あり、僥倖の機會あり、又設け起す機會あり、大丈夫徒らに僥倖を賴まんや、大事に

臨んでは是非機會を引き起さずんばある可らず、豪傑の爲したる事を見るべし、設けたる機會も跡より見れば、僥倖のやうに見ゆ、氣を付け味ふべし。

佳人の歌

みどり

FOR HELEN.

My thoughts are like the little birds,
Your heart is like the nest;
They rove the sky on fearless wings,
To you they come for rest;
Well-knowing, though the world be fair,
Your tender love is best.

My songs are like the little streams,
Your heart is like the sea:
Though through the woods they wander on
So careless, glad, and free.
They seek at last the silent deep,
They come at last to thee.

GRACE H. DUFFIELD.

調を合せ、意を酌みて、ヘレンが郎に贈るに替て譯す。

妾か思ひは小鳥の如く　君が心は巣に似たり。
つばさ擴げて大空行も　歸り休むは君にのみ。
世は花やかに廣くとも　君が情けに越者なし。」
妾が口吟は小川の如く　君が心は海ならめ。
木の葉隱て流ゝとても　心のまゝにさまよふ迚も。
落る所ろは大海原　君に行ずてまた誰に。」

小說

流れの葦

是空子

（三節）　港　（下）

左なきだに無頓着の人、酒氣の巡るにつれて一層容赦せず、天下を睥睨する調子にて、何の愛想もなく、

一躰、幾歲あんだ?。

突如として問ひぬ。かゝる問を迎へんとて樣々に工夫し、獨得の巧辯を以て切りに誘ふと云へど、先つ飲みたき丈け飲み、食ひたき丈け食ひしのちならではの景色にて、チョッカ、イも、堂々たる猛獸には其功なく、只管ら困り切りて見へし折柄、今や此猛獸は、十分に飲食し、腹の膨るゝまゝに稍やく顧りみ、慰さみがてら口より風を吹出して、心もなく、一言の問をつくりぬ。如才なき男、好機千才の一遇と悦こび、

お十九でにくゝない處で、か、御容色が御容色で、誰が見ても、十七、左樣、十八には迚も見へませんテ。夫に、お妹子、そのナンデゲス、お妹子が一人ありましテネ、

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

之が、今年、お十四で……餘計の事、クソ面倒なりと、顏を外向け、又、グット一杯を傾むけ、

學問は、どこでしたのか。〆たりと言ふ面相を勿躰らしく、シガレットに火を點して口に一寸と含み、何如なる鹽梅に此を食はせんと、暫らく思案して、少し見つめて、少し微笑し、

學問ですか、學問は、華族女學校第一等の卒業生で、恐れ多くも、上さまより特に御褒美を賜わりましたほどで、先づ、英語はもとより、佛語にも少しも不都合なくて、和漢學は申すに及ばず、歌、花、茶、琴、ピアノ、チルガン迄で。

もう、ヨシ〱、夫で、女權擴張者と云ふんだらう。

意外の一言に吉凶を辨じがたく、客は何れを好むかと窺がひて、此とも彼とも言くろめんず商人氣質は、逸早く、川上の滿面に冷笑の氣あるを察して、スラリ、語調を變へ、

所ろが、中々、女權擴張どころでなく、至極の昔し風でげして、言はば、學問を西洋にもして、心立を、古風にしたと申しませうか、女學子が所謂ゆる、武士の娘が洋學をした仲間でせう。一躰、温和柔順な、お生れつきで、どうして〱、今時の女學生の比では決してナイです。

少こし、思案すると云ふ躰を見て、此處ぞと、つけ入り、其上、至つて御孝心が篤く、感じ入るほどのお心掛です、又御姉妹中の美わしいとは、畫に書いたほどで……

川上は笑を含み、

滑川さん、仲人口がなか〱甘いぜ。

之は怪しからん、先生、全く以て實際の事で、野生などが吶辨では、述べ盡せないほどでげすナ。

ダガ、夫程申し分のないのならば、幾らも立派な縁談があるだろうじやないか。

イヱ、夫故、先生へ御相談申上升すので、ナニ、隨分と申し込がありますノデ、夫は中々大したとです、然し、主人は、先生を見込んで、是非、先生でなくてはと云ふ所ろから、ソノ野生が推參した譯デ……。

聞かざる如く、鼻であしらい、最后のサラドを半ば殘して突き出し、

チイ、アイスクリーム。

給仕は、飛ぶが如く命に走れり。癇物にさはり、癇癪玉に觸れ、暫らくにても猶豫せば、直ちに破裂するかの如く掛念して、急ぎ急ぐ。

マア、常人は、吾々には結構でせう、ダガ、子爵の娘で、頭取の長女と云ふのは、困ルテ。

得意顏に肩を動かし、少し應揚に、

御身分がと仰せらるゝのでせう、ダガ、夫も、主人が能々入念いたし居られましたとで、決して其邊の所ろに御心配なく……

ヂロリと見て、冷笑し、滿腹の勇氣を吐出するが如く、聲ひくき、

イヤ、私は、金持とか、位とか云ふものが大嫌ひだ、ソンナ奴の娘めを貰つて出世の階にしたなどと思はれるのは、面白くない、一躰、貧乏人や弱いものが好だから、穢多か乞食の娘でも貰いたいと思ふんです、大山さんが、其氣になつてくれゝば、相談もしようテ。

愕然として返すべき辭を知らず、俯して、アイスクリームを見れば、漸次、漸次、肩を低ふし、消ても入るべき姿なり。此まゝ失なひてはと、後生大事に、スプーンにて、一杯、一杯、酌み取り、汲ひ取り、シマツタ、エライ事を言ふ奴だ、途方もない奴だ、調子外れの困つた野郎だと、つぶやく、不平を飲み込み〳〵。

先生、實に感服、敬服の至りで、イヤ、左樣ありたいとで、御尤です、實に痛み入たる次第です、然し、主人は其御氣象をお見込み申して、野生に暮々申しきけましたとで、實に、敬服、感服の至で、ハイ、イヤどうも恐入りますとで。

勝手に感服しろ、貴樣達のお辭義は半文の價値もない、米つきばつたの方が正直だ、ハゲ頭め奴、狸奴、此の老翁奴、とにらみ〳〵、口の中に叱咤し、エイツと、癇癪玉を少々ころがし、立つて、コートをつかみ、無理無作法に手を通ふす。

給仕は飛んで來て……介抱す。

出立の觸はあけれど、樣子に夫と覺りて、ナプキンを尋常にたゝみ、テーブルにチヤンと置き、シガレットの煙に、目を細くし乍ら、立ち上り、

お宅まで、おともしまやう、大きに御馳走さまで……

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

吸煙室の口に掛たる紗の幕に、先刻より、人の頭、屢ば映じ亦た消え、亦映じ亦消ゆ。

給仕の愛想よき世辭に送られつゝ、ドタリ、ドタリ、大手を振つて降る。后りへに、チヨロリ〳〵、何か忘れものはなきかと見廻しつゝ、給仕に會釋しつゝ、思案しつゝ、附いて降る。

吸煙室の幕を跳ねて、半身を出し、斜めに、行く人を睨視するは、是なん、曩に、ソーフハの上に無何有郷に遊びたる客なりけり。今や覺て性僻全身に溢れ、眼に獲物を窺がつて、特に凛々し。

ヲイ、川上と一處に來たナア、誰だ、知つてるか。

給仕は、元氣なげに、

存じませんです。

通りに向ふ方に歩み行きて、腹中獨語、

知らない？、大山の執事だらう、滑川要三とか云ふナア、彼奴の事だらふ、川上に娘をすゝめる對談なんだ、サスガ抜目のない華族サ。

心の極底より歎息し、

ダガ、此上、彼奴に後れを取つて溜るものか、何かにつけて悪い奴、

淺黒き面相光り、瘠せたる躰尖り、聳然、肩を高くして決心の狀あり、

キツト、邪磨するゾツ。

腹中の蛇

（其三）

湘川流夫譯

其蟄居は市中の平安を保つに大なる益ありたれど、ロデリック自らの身の上には、却て効なく、其れがため暗愁鬱悶益々長じ、終日唯一の職務の如く、腹中の蛇と交はり、其魔物も又共に相語れるに似たれど、折々出る吹嘘の音の外には、他人には解り難く聽え難ければ、其意を知るに由なかりき。斯く被害者の平生忌み怖るゝ、迫害者と共に親み交はれるは、甚だ奇怪の事に見ゆれど、此亂れ、起れる感情は、互に相容ざる者に非ずして、反對の兩性は却て屢々相助け、双方の力を増すとあり。去ば恐るべき愛憎駭くべき好惡の兩念は、ロデリツクの心中にて互に相擁し、共に齊しく潜伏せる怪物の上に集

來れり。其の怪物も、又他より這ひ入れるか、或は其處にて生れ出でたるか、ロデリックの腹に蟠り彼れの食物にて養はれ、彼れの生命の養分を吸ひ、彼れと親密に交はり、己が身の如く彼れの心を知れり。尙世界の受造物中にて、最も不潔と見做さるゝ、不思議なる動物なり。以上の事柄は奇は奇なれども、尙總べて人間一般の病性を代表するに足らざる所なかるべし。

折には、ロデリックは、蛇を惡み、己れを嫌ひ身の危險を厭はず飢餓によりて殺害を試み、己れは既に斃れんとしたれど蛇は却て內心に喰ひ入り、其を此上なき食物として喜び、益々活動の力を有てり、或る時は又己れを殺さずんば、惡魔を殺し、左なくば共に死せんものをと、陰に毒藥を用ひたれど、是れも又誤謬にて、蛇は弱れる氣色なく、礜石も猛汞も物とせざるは、身に反て消毒の力を具へ居れるが如し、醫師は烟草の烟にて燻べ出ださんとすれば、魔物は己が生命を保つ空氣の如く喜びて、之を呼吸し、阿片と酒類とを用ひて醉ひ蕩かせ、腹中より吐かしめんと爲たるに、ロデリックの感覺を失はしめたるのみにて、胸に手をあてゝ窺へば、是は其も如何に、藥劑の力に元氣を得て、跳ね廻りつゝ狹き領分を横行し、勢益々猛かりければ、其れより後は施すに術なく、皆匙を抛つて自然の力に放任せり、ロデリックは舊に復り、鬱憂遣る方なく、喉の下に蟠り居る、其親友の顏を見んとて、且つ樂しみ且つ怖れ、口を開いて鏡に對し、日を送りしと屢々なりしが、或る日其思を達したるを見て、叫ぶ聲の聞こえしより、召使は遽だしく、部屋の中に走せ入りしに、其の氣を失ひて倒れ居りたるを見たるとありき。

醫師は細かに病狀を診察し、其の全く狂氣と言ふ程にてもなく、幽閑は却て効なく、殊に其精神を害し、療さんとする病を益々長ぜんとするの恐れあるを知り、共に相謀りて再びロデリックに自由を許せり。ロデリックは、放肆に風俗習慣を打ち破り、其行狀は太だ奇なりといへども、世は彼れを目して狂人となすべき、明白なる正當の理由なかりき、ロデリックの癲狂室を出でゝ市中に歸り來りしは恰もジヨージ、ヘルキメルの尋ね來りし其前日なりき。

事の仔細を探り得てより、彼の彫刻師は、震ひ悲める一人の友を誘ひ、再びエリストンの住所を訪へり、其の家は古風なる木造の建築にて、市街の通衢とは、三段の敷石を以て區別し、前面には老木枝を接へ、幽鬱として立ち並べり、曾て一度壯觀を呈せし、此の大いなる古宅は、百餘年前、エリスト

ン家祖先の建築に係る所なりき。其當時は、地價の割合に廉なりしより、庭園其邸内の大半を占め居りしが、其後次第に減少せしも、今尚背後の方に木蔭の立ち蔽へる空地ありて、學者、空想者若しくは鬱悶に苦しむ者をして、終日綠草の上に横はり、風に囁く小枝の音を聽き、世間の煩雜を忘れ、神心を養はしむるに足れり。

寄書

○男尊女卑習慣ノ近因（上）

不燐生稿。

雲横秦嶺家何在、雪擁藍關馬不前、諸君余は自説を叙するの前に於て諸君に向て諷せざるべからざることあり。抑余が前程には「田舍」と云へる白雲漠々として眼睛を掩殺し「不自由」と云へる積雪が行路を埋却して證言を得るに由なきを是れなり。實に余は眞理の家何の處にあるを知らざるに彷徨し馬否蹄の進まざるに躊躇せるなり。然れども天の我に與ふる決して偶然ならず故に必ず正を好みし義に進むの眞心を賦與せらる。請ふ見よ聖人すら尙路窒の謠歌を聞きて以て自から戒しめ政令を勵ましたることは支那の史上に赫々たり。更に我邦に於ても孝謙帝の鐘匱は言ふに及ばず歷朝吏を派して民の疾苦を問はしめ或は微行して政令の良否を察することを少しとせず。されば田舍人の樸訥直率なる或は彼の輕佻浮薄なる都人士の上に出づることあらんも未だ知るべからず何んぞ自棄すべけんや。素より余は暴虎を學で河を馮る者にはあらざれども愈進で我が有る丈の精神を鼓盪し彼の不自由なる田舍の白雲漠々たる溪路に於て頻に疾鞭を加え馬蹄の速力を倍蓰し秦嶺の表監關の外に突進し論理の曠野に驅馳せんと欲するなり若し諸君にして幸に優渥なる愛情を以て一讀一笑し玉はらば余の幸大なりと云ふべし。

夫れ結果を見るを得は必ず其因なかるべからず見よ埃及に於て養培せる所の文化は希臘の囿苑に花を開き羅馬の枝頭に果實を熟し今日歐米人の口に上る其滋味甘汁決して忘る能わざるものあるなり盡し之を彼の東洋印度の不罌花と支那の茉莉花の三千餘年前に燦爛たりしも徒に凋落し去りて殆んど秋末の狂花一般其果を熟する能はざるものに比すれば抑も亦同日の談にあらざるなり夫れ然り今日歐米の文果滋汁の眞風味は嘗て羅馬盛時に熟したる果實なり羅馬法律今日歐米の法源となり羅馬の政論に今日歐米政治家の論證する所となる況んや水學の源は羅馬の跳水に基因し古柱古棺は碑石化學の源なり變弧の勞力に依りて梁架を横桿に基く重學の源知るべし描畫眞に迫り刀鐫精妙を極む是既に美術の源を開く是故に徒に今日結果せる文化に心醉し淵源を往時の養培の良好に溯求せざるものは其弊や亂離背戾共に語るに足らざるなり。

余は今日我邦の婦女子の如何に男子の爲に冷遇虐待せられ玩弄物視せらるゝやは玆に之を論ずるに遑なきなり然れども何人にても男女平等の情交なきを即ち女子は男子の良婢にして妻は決して夫の敬愛すべき朋友ならざることは之を疑ふものはなく實に女子今日の境遇は怨惡すべき憐察すべき囹圄の裡に呻吟しつゝあるものなり。

現時女子教育に關する學校の設立日を追て多く隨て女學に關する著書雜誌類の刊行も亦少きにあらず其宗教に關すると否とに論なく又正に女子の眞相をして發顯せしむべき端緒に近きたりと云ふべし殊に二三年來萌芽を發して未だ充分の成長を遂げ能はざりし廢娼論は今年各地方の府縣會場に於て往々燦然たる言論の花となり殊に群馬縣會の如き甘味なる廢娼建議の結果を呈せるあり余是等の報に接する毎に中心竊に快然として荊棘を拔きて平廣なる原野に出づるの思あり若し斯の如くにして止まずして數年の星霜を以てせば青天白日の下に於て彼の婦女子の掠奪せられつゝある處の權利を回收したる愉快なる紀念碑を見るを得べきことを信じて疑はざるなり夫れ然り世に幾多の正人君子の女權挽回の爲に斯の如く甚だしく夫れ勉むるあり然れども彼道德家宗教家は多く之を正義の鋒を以て刺さんとす是故に喪心破德の者は往々其旨を得ずして止むものあり社會論者は体面を汚瀆すと云ふとも彼等腐敗の腦中焉ぞ其效驗を奏せん經濟學者の論法律學者の議尙偏するの謗を免る能はず之を以てか世往々「尙早し」とか「却て婦德を損す」とか「社會に害毒を傳播す」とか種々なる口實を設けて余輩女權回復の爲に少からざる障害を成すものあり余を以て之を見れば是等の反射は余輩論者が其本を究めずして其末に狂奔したるが爲に生じたる反動ならんと信ずるなり何ぞや試に見よ或る論者は滔々辯して曰く王朝以來平氏の時に至るまで既に我邦に於て自由情交の緒に就けるを見る「時雨する稻荷の山の楓葉はあをかりしより思ひ染めてき」と云へる歌とか賴政の五月雨の歌通盛の丸木橋の歌の如き皆然り然らば進化の原則よりして今日は既に自由結婚及び男女情交の隆盛の時に在るべき筈なるに幕政時代と變じ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

掠奪賣買贈與の婚姻法の餘習を存せるは實に奇怪なるものなりと是れ則ち余が之を視て以て我邦今日に至るまて婦女子待遇法の起因を究めざるの誤ならんと甚惜する所以なり即ち前に其本を究めずして其末に狂奔したるが爲に生したる反動ならんと論じたる所以なり之を以て余は田舍の不自由なる荊棘中に於て殊更淺才寡聞をも顧みず余が學び得たる所を以て男尊女卑習慣の起因を探索せんと欲する希望を生じたる所以なり大方の諸君幸に憐察を垂て更に教ゆる所あれ玆に於て余が諸種の書よりして鈎取したる男尊女卑習慣の起因なりとなす處を約言せんとす起因とは何ぞや曰く儒教主義の餘響に在て存する是なり是を以て余は以下儒教の曾て我邦に於て有せし勢力の有樣と儒教には如何なるとを論じたるか將又儒教を祖述せし後世の學者は如何と之を左に略陳せんと欲するなり。

我朝應神の御宇漢の文化を百濟より傳ふ之を儒教傳來の始とす之より以前の事は之を日本紀古事記の類に徵すれは之を知るを得べしと云へども余は常に以爲らく此等の書は之を要するに應神以後漢の文化に薰炙せられし者の手に成りたるを以て見れば(古事記は元明の朝太安麻呂の撰日本書紀は元正の朝舍人親王の撰)其說漢を擬して漢にあらず別に倭樣の說を造設したれども純粹の倭にあらずして漢の胚中より蟬脫したる神州の古說ならんと其說の往々支那の古史に似たるあるを以てなり之を以て余は應神以前の事は之を謂ふを欲せす之を論ずるを屑とせざるなり倩應神の朝漢土の文化を傳へてより直に大鷦鷯、稚郎子兄弟の辭讓を見る儒教の感化一何ぞ此の如く速に且つ大なる下て小野妹子を隋に遣すや偶推古朝の官位改正とふる加ふるに豐聰耳皇子の十七條皇子の佛を信ずるの厚きすら尙多く仁義忠孝を叙せしにあらずや始め釋典(佛)を欽明の朝に傳へてより一時儒佛の軋轢猛烈にして過害を當時の社會に流布せしにも關らず釋は多くは人心私の動作上にのみ向て勢力を有し儒は之に反し公務施政の顧問は必す之に依る大化の制は云ふに及ばず中興の英主天智の朝には唐制を摸倣して郡縣の制度を立つ夫れ孔子は周の群雄割據の弊を察し尙書二帝三謨の治を誦し周禮を記して暗に郡縣の治を稱す唐の郡縣の制は是れ孔子の教のみ下て文武の朝に在て大寶令となり聖武の朝に在ては冕服受朝となり更に貞觀政要となりて現はれ延喜格延喜式となる主殿寮の燎燭率分堂の草若くは寒夜の脫衣は是れ何に基くか況んや隨時遣唐使を遣し留學生を派す是等は皆孔孟の教に卜せられ歸れは必ず朝廷其言を用ひて施政の方針を化す抑も儒教の我國に於て勢力を擅にする決して偶然にあらず又何ぞ公務施政のみならん人心の向背を支配するものは必ず孔孟の片言なり孔安國の孝經の注本は彼に傳はらずして我に存す或は万乘の身を以て自から孝經を註せるあり文章生を擧げて諸國に孔孟の教を布かしむ佛は何ぞ之に抗するを得んや。

時事

○所屬問題

第二回議會追々に近づく時、連りに耳にするは議員黨派の所屬問題にして、現に目前に迫りたる、もしくは、前議會より遺留したる緊要議案に關し、幾干の打合せ相談などありたるかを承知せず。黨派別は何故え左程に大切なりや、議案に接して赤白の派を別つにはあらず、たゞ感情推察によりて平時其色を分別し、其分別によりて感情を隔離し、いよ〳〵以て其分離を甚しくせんとす。如此きは、國民を代表して、至公至平に、邦家の事を議定すべきもの丶度量にはあらずと思はる、何如ん。

○勞働者問題

鐵道買上の事。會社制限の事。勞働者の時間、組合、貯蓄方の事。北海道開拓の事。殖民の事。山林修治の事。など、皆な大ひに考ふべき緊要問題なり、而して皆な勞働者に關係せざるはなし。志士が、社會問題に留念するの意、ます〳〵切ならんとを要む。

○女傳道師

メソデスト派女宣教師會は、來る三日の總會議に於て、甲府女學校教頭ウイントミート女史が發案に係る、日本女傳道師を置くの件を議定せんとす。此の女傳道師は、西洋來の女宣教師と、同格同權を保つよしにて、最初四大部に、各一人宛を定置すと云へり。是亦た慶賀すべき一進歩なり。

監督ヘヤー氏征く

滯在僅々たる日數に、驚ろくべき改革を監督教會内に惹起し、特に、立教女學校の爲に、非凡の卓識を表出したる、ビショップ、ヘヤー氏、歸り征けり。本邦信徒が之を尊待すると一方ならず、故に來ん年より、一歳半期を約して來り此地の監督とならんとす。而して、氏が日本を愛し日本を敬まひたると亦大方ならず。諸事其の意外に出たりと言りとぞ。出立の際、取分け、立教女學校の爲に顧慮し、其家具什器を一切寄附し、且種々の用意を爲しぬ。立教女學校の改運すでに前號に記載せし如し。然て、熱心忠愛なる大須賀亮一君の下に、幹事小宮たま女史、教師、林、小澤、松原、安藤の四女史、ありて、宛から一躰同心の如く、今后一切の責任を負て彌よ奮進せんとす。同校の前途刮目して待ち望むべき也。

○レビット夫人

社會改良の宣言を以て全世界を一週遊説したるものは、古來未だ曾てあらず、然るに、一婦人の身を以て、身に前途の旅用をも備えず、卒然立ちて出程し、ゆく／＼同志者を動かし、四方の義人に歡迎され、思はずも既に世界を一週了したるは、珍らしき偉事にあらずや。

此の偉大なる事業を成就したるレビット夫人今や正に米國に歸着したり。其本國を出たるは、千八百八十三年（八年前）七月十三日にて、今茲、六月十八日、ボストンに着す。一週旅行の中、支那、日本、印度、南北歐羅巴、埃及、濠洲、瓜哇、等の諸國に於て、大集會を催たると、一千六百回、相違せる國語を用たると四十七種、爲に、通辯を聘したると、二百三十一人なりとぞ。

來る十一月、ボストンにて開かるべき、全世界婦人禁酒大會に出席し、更に南亞米利加を一巡し、以て悉とく全地に足跡を印し、禁酒、女權、福音の宣言を爲さんとす。

吾人は、其の恙なく歸國ありしを賀し、嘗て、ウイラード會頭が述玉へる如く、本年に於て、同夫人が米國婦人禁酒會の會頭となり玉はんとを信じ且つ祈ると云ふ。

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

問答

可愛子

●問。報知新聞附錄報知叢話の小說「三日月」の作者ちぬの浦浪六とは、誰の變名ですか。(南紀一書生)。●答。村上信氏です、はじめて文壇に上りました人です、

●問。安藤太郞、田口卯吉、兩氏の御住所を教へて下さい。(在靑森W.S.)

●答。安藤氏は、麻布本村町　番地、田口氏は本鄕駒込西片町十番地です。

●問。文章の抑揚、波瀾等の事を教ゆる書は、何がよろしう御座いますか。(大阪山口生)。●答。麴町富士見町一丁目三十三番地益友社から出ます、岡三慶氏の文法學講義がよろしう御座いませう、代價は上下七十錢と、外に郵稅がつきます。

●問。貴社から出ます作文口授と、文法口授とは、別物ですか。(山口縣一女子)。

●答　全く別物です、いづれも鈴木弘恭氏の著された物で、兩方共に益があります。

●問。色の消へぬやうに、襦袢の衿の汚れを取る簡易の法はありませんか。(山口縣一女子)。●答。火止めでない石炭油の中へ、三四時間、若くは半日ばかりも汚れをさらうと思ふ物を浸し置き、少し揉みて引上げ、堅く絞り(石炭油は棄てずして用ることが出來ます)ソシテ火鉢の中へ、番茶をくべて、立昇る其煙の上に。絞りたる物を、廣げて居りますと、石炭油の香ひ全く去りて、其布の汚れは盡くされて仕舞います。

●問。貴社から出ます「女學生」は一號から揃つて居りますか。(綠水女史)。

●答。揃つて居ります、本年になりましてから、三四號賣り切れになつたのがありますが、一號から八號あたりまでは皆揃つて居ります。

●問。私は此の頃自分の罪といふことを感じて、どうかこれを取らうと思ひまして、骨折りますが、苦しくばかりあつて、罪は減ずることが知れませず、悲しくて仕方がありません、どうしたら宜しう御座いませうか。(京都、むめ子)。●答。自分の罪を感ずることは、甚だしき幸です、パウロが「噫われ困苦人なる哉」と歎息したのは、後に「我れ自ら生けるにあらず、基督我れにありて生けるなり」といふに至りました端緒です、若し此歎息がなかつたなら、パウロの新生はなかつたのでせう、けれど、こゝに注意すべきは、自分の罪を自分が除かうと思ふの非なることです、パウロは「此死の躰より我を救はんもの誰ぞや是われらの主耶穌基督なるが故に神に感謝す」を申したではありませんか、私共自分の罪をば、神の前に悔ひ改むると共に、小さき我といふものを全く棄てゝ、偉大なる基督に從ひ奉り、基督の如くならんことを望むが肝要です、畢竟自分が大きくなり、善くなりますれば、罪は次第に、自然に、されて參ります、雜誌の紙面、限りがあつて、委しくは申上げられません。

女報

可愛子編

●皇后陛下の御弔詞　吉田樞密院顧問官は病癒へずして遂に死去せられたり、皇后陛下には之を聞し召され、早速女官を以て、子爵の死去を弔せられ、且つ夫人が永々の看病を慰せられ、御菓子一折を賜はりたり。

●北白川宮殿下の妃　同能久親王妃富子殿下は、靜岡岐阜兩縣下に旅行として去る四日出發遊ばされたり。

●後藤伯の夫人　は過日家族一同を伴ひ大磯の別莊に赴けり。

●留學女史歸朝　海軍大佐世良田亮氏の妻信子(廿六)は去る明治廿年、米國ペンシュルバニヤに留學として赴き居りしが、八月二日午前橫濱着の郵船チヤイナ號にて歸朝せり、山口縣の美山貫一氏の妻女も、同行して歸朝せりと。

●社員安藤たれ子　は病氣にて久しく大學病院に入院せしが、此程全快退院せり。

●開成女學館　麴町なる同館は、過る七月三日を以て、閉校の式を擧行せり、式場に於て同館生徒和漢文の祝詞及び歡迎の辭を述べ、英語及佛語の對話暗誦等あり、餘興に琴の調べありて、最後に抹茶の式を行ひ、夫より來賓に茶菓を呈して散會せり、當日來會者は大凡六七十名ありたり。

●鳥海女學校　本鄕弓町二丁目に設立せし同校は、和漢英數學を始め、家政手藝畫學禮式茶道花道等を敎授し、之を卒業せば高等女學校へ無試驗にて入學するを得べしといふ。

●貧民教友學校　深川區内各宗寺院一同の發起者となり、滿三ヶ年を一期として設立したる同學校は、昨年十月を以て第一期を終り、第二期を繼續したるに、昨今生徒は非常に增加して學校殆んど以前の二倍となりたるをもて、近日有志者を募集し、一層盛大に爲さんとて發起者二三名は目下奔走中なりと云ふ。

●女子高等師範學校　勅令第百三十七號を以て、文部省直轄諸學校官制の改正を裁可公布せられたり、其女子高等師範學校の部は左の如し。

女子高等師範校

第十四條　女子高等師範學校は女子師範學校高等女學校及小學校の女教員並幼稚園の保姆を養成する所とす○第十五條　女子高等師範學校に附屬高等女學校附屬小學校及附屬幼稚園を置く○第十六條　女子高等師範學校に特に左の職員を置く。教諭(奏任)附屬高等女學校生徒の授業を掌る。助教諭(判任)教諭の職掌を助く。訓導(判任)附屬小學校生徒の授業を掌る。保姆(判任)附屬幼稚園幼兒の保育を掌る。○第十七條　文部大臣は教官の中より附屬學校主事及附屬幼稚園主事を命じ其事務を掌らしむ○第十八條　書記は六人を以て定員とす。

●東京廢娼會の運動　同會は昨年の春社會に生れ出しより、或は公認娼妓の制度に關する材料を取調べ、之れを各地方の廢娼團躰及び有志者に通信し、或は同志

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

者の集合をなす爲め、絶へず勢力を養成し來りしが、過般市ヶ谷同會事務所に同會の重立ちたる人々相會し、(第一)總會を來る十月上旬に開く事(第二)今年の帝國議會へ公娼全廢醜業者公權剝奪の兩通を建白する準備の事(第三)海外の賣淫に關し當會首唱者となり廣く同感の志士を聯合して之れが制裁策を講ずる事(第四)此夏期休業中各委員用務避暑とを問はず其の旅行先沿道の廢娼團躰若くは有志者に向て東京廢娼會を代表して廢娼上の打合せ又は遊說する事等を議決せり、委員中既に渡瀨寅二郎氏は甲府山梨に向け、飯野吉三郎氏は愛知岐阜に向け出發せり、尙ほ植村正久氏は大阪へ用務の序に京都奈良を、巖本善治氏は專ら群馬埼玉地方を運動すると云ふ。

●李公使の歸國　母堂の薨去に付き、淸國公使李經芳氏は、降服の喪に丁り、百日間賜暇歸國するに附き、其不在中は汪鳳藻氏一時代理として、來任の旨其筋へ通報ありしと。

●貧民學校　甲府なる山梨英和女學校の教員、生徒にて組織せるキングスドーターの支會、共愛會の會員は目下二十名には滿たざるも、各熱き心掛をもて平生學びのいとまに、それ〴〵長ずるところの手藝をなし其所得をもて、慈善の費にあてんと計畫し居られしが、此度略其準備も整ひしをもて、來る九月よりは愈々外部に其運動をあらはし、學校の近傍に一家屋をかりうけて、貧民學校の如きものを設け、志あるも家貧にして就學する能はざる子女を擇び、必要なる書籍、物品等を悉く給與し無謝儀にて親切に讀書、習字、算術、及裁縫、手藝等を授け、兼て心靈上に就き懇に教導し、後來世に處して獨立し得るだけの力を有する、正しき婦人を養成せんとの目的にて盡力し居る由、而して教授の任に當るものは、主に同校の教員なりと、誠に美はしき擧と申すべし。

●靜岡婦人懇話會　小杉管子氏の發起なる同會は、本月一日午後一時より淺間公園内の靑葉館に開かれたり。

●靜岡縣尋常師範學校女子部生徒　は本月一日より三十一まで休暇を得、各々家に歸れり。

●婦人友愛會　大成なる同會は、去る四日其第一集會を開き、有益の講談ありたり。

●義勇の妻女　島根縣石見國邑樂郡日貫村大津千代千代太妻しげ子は、明治廿四年六月十二日同村室田種平家宅失火の節、同人妻サキの焰煙中に陷り死に瀕するを認め、自己の危難を顧みず、婦女子の身を以て猛火の間に冒進し、爲めに躬重傷を被むるも屈せず、遂に之を救濟せる、其義勇詢に奇特なりとて明治十四年十二月勅定の紅綬褒章を賜ひ、其善行を表彰せられたり。

●慈善音樂會　は八月四日貧民の爲めに、宮城縣仙臺坐に於て開けり、聽衆甚だ多かりし。

●產婆の開業　宮城講習會の卒業生山田なほ子、渡邊まさ子、前橋ちさせ、鈴木たけ子四氏は、仙臺市に開業せり。

●女教員講習會　香川縣高松市に於ける同會は、最初會員の豫定三十名なりし所、申込むもの意外に多く、非常に盛なる由、尙ほ會塲は南新町の處、都合により中野天神境内高等小學校分教塲へ轉じ、去る四日より開會せり。

●長崎師範學校女子部　は明治十七年六月始めて設置し女生徒二十名を養成せしめらる、同十九年四月に至り男子の師範學校に合併して即今の名稱となれり、校舍の位置は市の東偶にあり、土地高燥閑靜にして空氣淸淨なり、生徒の定員は四十名なりしも昨年の縣會に於て半數を減ぜられ目下廿名となれり、誠に女子教育の爲めに痛歎すべき事なり、卒業生は廿二年五月を以て始めて第一回を出し、爾來年々十名前後の卒業あり、何れも各郡市に奉職せり、そがためにや各地とも女兒の就學追々增加する傾きありと云ふ。

●柴田女學校女子部　長崎なる同校は、英和字彙を著されたる柴田先生の私塾にして、女子に適切なる學科を授けらる學期は二ヶ年半にして、高等小學を卒業したるもの多く通學せり。

●勝田裁縫學校　長崎の同校は私立にして裁縫の教授を主とすれども、亦普通の學科を加へたり。

●長崎の小學校　は市には八九個の小學校あり、されど女兒のみを教育する所は唯第一高等女兒小學校と、尋常皎山女兒小學校とのみなり、生徒頗る多く職員の過半は師範學校女子部卒業生なり、高等科を終へたるものゝ爲めに更に裁縫專修科の設けありて大に便利なり、尙ほ一般女子の就學は市の人口一千に對して二十四人男子は三十七人の割合なりといふ。

●北海禁酒會の夏期親睦會　は七月二十五日執行せられたり、頗る盛會なりし。

●佛國人口減少の原因　佛蘭西の人口の繁殖せざる其原因は、土地を小さく分つと、女子の婚禮するに當り持參物を與ふる等と賜望扶私にて死するもの多き故なりと。

●酒入の菓子を禁ず　米國に於ては十六才以下の小兒に一%以上の亞爾箇保爾を含む菓子(ボンボン等)を供給すべからず右の之に背くときは若干の罰金に處すと禁酒國の注意周到なりと云ふべし。

●日本婦女子論　元の華族女學校教師アリスマベルベーコンは、近日日本婦女子論と題せる書を刊行したりといふ。

●英國女王ウヰクトリア　陛下が、露國皇后陛下に送り給ひたる親筆の手紙一通は、此程倫敦に於て三十八弗にて賣買になれりと。

●英國女王　は七十二歲に達し給ひたれば、先代の國王中、女王より長年なりしは、ジョーヂ二世と同三世のみなり。

●白耳義女皇の病重し　八月三日倫敦發の電報に據るに、白耳義女皇は重病に罹り、最後の聖禮を受けたりと。

六合雜誌

八月十五日發行 第百二十八號
一冊八錢○半年四十三錢○郵稅不要

窮民救助策を講ずるの必用 文學士 金井延
基督論 海老名彈正
日本婦人の敎育に就て 文學士 和田垣謙三
金森通倫氏の基督敎論 浮田和民
書翰 本多庸一
水泳論 伴直之助
批評 竹越與三郎氏著新日本史

發行所 東京本鄉東竹町三十四番地 警醒社

少年園

面白き新材料混々として泉の流れ絕えざるが如きは**少年園**なり。最初發刊の一號より今日の六十七號に至るまで、挿畵の精巧にして有名なる寄書家に富めること、諸雜誌中恐くは此右にいづるものなかるべし、殊に六十七號より依田學海先生の**新躰文章を作るの法**の如きは、文を學ぶものゝ爲には眞に暗夜の燈といふべし。又六十七號には**幽靈新郎**といへる十四頁の**一大附錄**あり湖處子の譯する所にして一讀卷を掩ふに忍びざらしむ。江湖の少年諸君幸に愛讀の榮を給へ。

每月三日十八日發行。定價壹冊金五錢、十二冊(半年分)金五拾五錢、廿四冊(一年分)金壹圓。郵稅壹冊金五厘。爲替拂渡局駒込郵便局。

東京府下北豐島郡上駒込村十九番地 **少年園**

同志社女學校生徒募集

來ル九月十四日始業入學志願ノ方ハ同日迄ニ申込アルベシ規則書ハ郵劵二錢ニテ送付ス

京都市今出川 同志社女學校

看病婦生徒募集

入學志願者ハ九月十日迄ニ必ズ申込ム可シ○年齡滿二十二年以上ナリ讀書算術等出來得ル者○敎授ハ書籍口授臨床講義實地傳習等ナリ○學資ハ書籍薪炭油看病服等ヲ給與スルヲ以テ食料大凡壹ケ月金貳圓五拾錢ヲ要スルノミ○校則望ノ向ヘハ直ニ送付ス

京都烏丸通上長者町角 **京都看病婦學校**

私立明治女學校生徒募集廣告

小學尋常科卒業の人は無試驗にて最下級即ち豫科第一年級に入ることを得。豫科を三年とし高等小學科の敎授を悉くす。吉田のぶ子其科長たり、巖本善治氏之を監理す。豫科了りて後ち本科を三年とす、賢妻良母を養成することを主旨とし、家政女藝及び女學を悉とく敎授す。

◉右九月十日後各級に入學を許す、規則書需用の人は郵劵封入申越あれ。

東京下六番町 明治女學校

廣告定價

一行	一回	前金拾錢	(廿七字詰)
同	三回以上	一割引	
同	六回以上	二割引	

十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絕す慈善上の事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を揭ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する每に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分每に十部增の割合と定む

雜誌定價

一冊。	六錢	郵稅。五厘	(但府內無郵稅)
十二冊。	五拾八錢	郵稅。五錢	(同前)
半年分	壹圓四拾三錢	府外は	壹圓五拾六錢
一年分	貳圓六拾錢	府外は	貳圓八拾六錢

發行所 東京市麴町區下六番町六番地 **女學雜誌社**

編輯兼發行人 巖本善治

印刷人 堀口庄三

女學生

第十五號には、暑中休暇前の奮發に成りたる八校の女秀才が腕くらべの文を載す

附錄には銅版富士山の圖を入れ、天知子、可愛子が簡潔明快なる紀行を掲ぐ。

每月一回發兌●一冊郵稅共六錢

女學生

悲哀胸を打つ……

まとひの筵

偶感數番……暗光子

英雄の眞面目（偶感二）……川合信水

學友よりの手簡……山月子

都下の夏遊び……如見子

樂情……野雄

睦びの家

春夜書感……（明治女學校）鈴木げん子

婦女子の職務……（女子學院）瀧口みか子

古烈女の傳を讀む……（女子神學校）森田千か子

普通學の必要（下巻）……（頌榮女學校）德澤ゝす子

竹に對するの感……（女子神學校）山田いく子

春日山に遊ぶ……（越後高田女學校）赤井さら子

女子獨立學校閉校式祝歌……（女子獨立學校）加藤さし子

卒業式の感……（立教女學校）伊藤さよ子

水邊納凉……（東洋英和女學校）飯塚しづ子

校を閉づる時……（女子獨立學校）矢田たき子

附錄

富士登山の仙話（富士山の圖入）……天愛子

女學生全盟各女學校は左の如し

○明治女學校○女子學院○新榮女學校○女子神學校○共立女學校○フエリス和英女學校○頌榮女學校○跡見女學校○立教女學校○成立舍女子部○女子獨立學校○海岸女學校○長榮女塾○東洋英和女學校○青山英和女學校○金城女學校○高田女學校

女學書類發行

女學雜誌社編輯

家庭廉價 子供の談

紙數八十葉　郵稅なし　定價十二錢

右は子供の爲にある好きお話にて、母親が言ひ聞かすに結構なる材料なり。第一、田舍音樂師。第二、菫の君。第三、熊と旅人。第四、風と日の喧嘩。第五、ハイ〳〵とタヾイマ。第六、カンとクッド。第七、王にも勝てる人々。第八、母の愛。第九、柔順なる娘。第十、英雄の所業。第十一、ましき兄妹。第十二、正直な樵夫。第十三、慾婆。第十四、忠義の家來二人。第十五、不思議の新衣裳。第十六、小娘とガマ。第十七、尤も惡き所行。第十八、正直なる小娘。

西洋女禮

紙數六十七葉　郵稅なし　定價十二錢

右は、婦人紹介の事。婦人書面紹介の事。婦人訪問名刺の事。婦人會話の事。婦人案内の事。散歩、かざり、宴會の事。食卓上の心得の事。婚姻の事。客を遇する事などに分ち、西洋貴婦人の心得を一と通り平易に解明したり。

女子生理

紙數百九十葉　郵稅なし　定價廿五錢

右は、月經の事。懷姙の事。分娩の事。の三つに分ちて、くはしく女の生理の事を説き。且つ長谷川泰氏が婦人病の元因、村岡範爲馳氏が眼鏡の話と云へる二つの論を附錄としたるもの也。

和畫案内

紙數百廿葉　郵稅なし　定價五錢

右は八木兼辰氏の講述にかゝるものなり

兒育て草

紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は育兒の心得を問答躰にして、人の氣のつかぬ細かなる事迄て一々説明し、母として子を育つる總ての心得を悉く講述したり。

邦文學

紙數百六十葉　郵稅なし　定價二十錢

右は同志社教師松山高吉君が講述にして、和文躰の文法、語格を、極めて細密に説明したるもの也。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY